



## 労働の自己疎外とその止揚：マルクス「経済学・哲学草稿」と「資本論」

著者	杉原 四郎
雑誌名	関西大学経済論集
巻	1
号	2
ページ	51-68
発行年	1951-06-15
その他のタイトル	On Marx's Thought of Labour
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/15883">http://hdl.handle.net/10112/15883</a>

# 労働の自己疎外とその止揚

—マルクス「経済学。哲学草稿」と「資本論」—

杉 原 四 郎

マルクスにとつての究極の理論的実践的課題は、人間そのものの根本的把握であり、その全面的解放である。「独佛年誌」(一八四四年)に発表した諸論文の中で彼はのべてゐる、「ラディカールであるとは物事の根底を把握するといふことである。ところが、人間にとつての根底とは人間そのものである」(「ヘーゲル法哲学批判」ドイツ語版全集第一部第一卷六一四頁)、「一切の解放は、人間的世界の、すなはち諸関係の、人間そのものへの復帰である」(「ユダヤ人問題」前掲書五九九頁)。この点はマルクスにとつて終生変らなかつた。人あるひは「マニフェスト」以前の彼とそれ以後の彼とを区別し、哲学者マルクスと経済学者マルクス、あるひはヒューマニズムと唯物史観とを機械的に対立せしめるけれども、これはマルクス解釈としても問題であらう。たとへば資本主義社会の運動法則を分析する「資本論」の体系の底にも、いかに青年時代と変らぬヒューマニズムが流れてゐるかについては、別稿にもふれたこと

くであるが、「必要労働と剰余労働」人文科学論集第三号一一頁以下参照）、資本主義社会において極端な自己疎外に陥つた人間が、にもかかわらずそれを通じて「全面的に発達した人間」vollständig entwickelte Mensch（インステイテュート版「資本論」第一巻五〇九頁）にまで高まらざるを得ぬ歴史的必然性を解明することによつて、人間解放の運動に科学的基礎づけを與へることにこそ、「資本論」の究極の課題が存するのであつて、このことは、「資本論」をそれとほゞ同時代に書かれた國際労働者協会に関する諸文書と關聯せしめて読むなら、敬て説明を要しないであらう。

もとより「資本論」のマルクスは「独佛年誌」のマルクスと決して同じではない。單に人間の人間による解放を理念とするといふ意味でのヒューマニズムからは、さらには、プロレタリアートの解放なくして人間の解放はあり得ず、そのためには私有財産の止揚が必要であるとする社会主義的ヒューマニズムからさへ、マルクスの「二大発見」たる唯物史観と剰余價值論（エンゲルス「空想より科学へ」岩波文庫四四頁）や、マルクスによる階級理論の深化（「ワイデマイヤーへの手紙」改造社版全集第二十二卷八七頁）は、ただちにうまれることはできない。たとへば「政治的解放は一方においては人間の、市民社会の成員への、すなわち利己的、独立的個人への還元であり、他面においては國民、Staatsbürgerへのすなはち道德的人格への、還元である。（しかし）現実的個別的人間が、抽象的な國民を自己のうちに取戻し、その經驗的な生活、その個人的な労働、その個人的な諸關係における個人的人間として種族的、實在、Gattungswesenとなつた時はじめて、人間が、その固有の力、forces propresを社会的な力として認識し、組織し、従つて社会力をば最早政治力といふ形で自己から遊離せしめない時、はじめてその時人間的解放は完成せら

れたのである」(「ユダヤ人問題」前掲書五九九頁)と、「(理想的)社会のより高い段階で、すなはち個人が分業のもとに奴隷的に隷属してゐる状態がなくなり、したがつてまた精神労働と肉体労働との対立がなくなつたとき、また労働がたんに生活のための手段ではなく、労働そのものが生活の第一の欲求となつたのち、個人の全面的な発展とともに、生産力も増大して協同組合的富のあらゆる噴泉があふれでるやうになつたのち——そのときはじめて、せまいブルジョアの権利の地下線は完全にふみこえられ、社会はその旗のうへにかうかくことができる、各人は能力において、各人にはその必要におうじて！」(「ゴータ綱領批判」、大月書店版選集第十二卷上二四三—四頁)とを對比して見ても、三十年の歳月がもたらした思想の發展の跡を、問題意識の基本的同一性の上に、あきらかに見てとることができる。労働が人間にとつて本質的であるとする人間観が確立され、したがつて人間の自己疎外とその止揚といふ問題は、労働の自己疎外とその止揚といふ風に具体化され明確化されたといふ点こそ、その發展過程における最も注目すべき事柄であつて、これによつてはじめてマルクスは、「かたられ、思惟され、空想され、表象された人間から出發」する「ドイツ哲学」から完全に脱却し(「ドイツ・イデオロギー」大月書店版選集第一卷上二二頁)、「疎外」とか「止揚」とかいふ「哲学者たちにわかりよいことば」(同三四頁)も、マルクスによつて、歴史的必然性において語られるにいたるのである。

ヘーゲルの理性的・主体的人間観とフォイエルバッハの感性的・客体的人間観とを労働—生産的実践を樞軸として統一的に把握するところにその特色をもつマルクスの人間観は、ほぼ「ドイツイデオロギー」にいたつて確立する。マルクスはそこでヘーゲルのおよびフォイエルバッハ的人間観の抽象性を批判しつゝみづからは「現実にあるがまま

の、すなはち行動し物質的に生産してゐるところの、つまり一定の物質的な、彼らの恣意から独立な諸制限、諸前提諸条件のもとで活動してゐるところの、個々人（同一二頁）から出発する。すなはち、「人間自身は、彼らが生活手段を生産しはじめるといふや、自分を動物から区別しはじめるといふことと合致する」（一五頁）。ところで、すなはち彼らが何を生産するか、ならびに彼らがいかに生産するか、といふことと合致する」（一五頁）。ところで、「一國民の生産諸力の発展程度をもつとも明瞭にしめすものは、分業がどの程度に発展してゐるかといふことである（が）、……分業の発展段階がいろいろのことなるにしたがつて、所有の形態もいろいろのことなつてゐる。すなはち、そのつどの分業の段階は、労働の材料と労働要具と生産物との関係における、個人相互間の諸関係をも規定するのである」（一六頁）。しかるに「分業の出現と時をおなじくして、……労働と労働生産物との不平等な量的ならびに質的な分配、つまり財産があたへられ」（三一頁）、また「分業の出現にともなつて精神的労働と物質的労働とが——享樂と労働、生産と消費とが、べつべつの個人に帰属するといふ可能性、いな現実性があたへられる」（一九頁）。ここから「妻や子供たちが夫の奴隸であるやうな家族」（三二頁）、「都市と農村の分離」（五六頁以下）、「市民と奴隸との階級関係」（一七頁）が発生し発展する。「今や生産諸力が（私有財産の形で）個々人からまつたく独立し、そして遊離したものと（蓄積される一方）、……個々人と、生産諸力および個々人の本来の生存とを、いまなほつらねてゐる唯一の關聯、すなはち労働は、彼らのもとでは自己活動といふあらゆる外観をうしなつてしまひ、ただ彼らの生活を維持するにすぎないものとなつた」（八〇—八一頁）。ところでこのやうな労働の自己疎外の止揚されるための「二つの」実践的前提（として）、……それが、人間大衆を完全な無産者」としてうみだし（てゐるといふことと同時に）、……

…生産力の偉大な増大と高度の発展段階と」がもたらされてゐなければならぬ(三四頁)。「ただすべての自己活動から完全にしめだされてゐる現代のプロレタリアのみが、生産諸力の総体を占有することと、それとともに諸能力の総体の発展を確立することとからなる完全なものはやかぎられていない彼らの自己活動を貫徹することができるのである」(八一—二頁)。

さてこの文章のすこしあとにマルクスはつぎのやうに書いてゐる。「この段階にきてはじめて、自己活動は物質的生活と一致する。このことは、各個人の完全な個人 (totale Individuen) への発展とすべての自然生的諸性質の脱却とに対応する。かくして、労働の自己活動への轉化と従來の制約された交通が眞の個人間の交通へ轉化することがたがひに対応する。結合した個々人による生産諸力総体の占有とともに、私的所有はなくなる。過去の歴史においては、つねにある特殊な條件が偶然的なものとしてあらはれたに反し、いまや個々人の分離そのもの、各人の特殊な私的營業そのものが、偶然的なものとなる」と(八一—二頁)。この文章を、さきに対比した二つの文章の間に位置せしめるとき、ひとはこれが、その一年前にかかれた「ユダヤ人問題」の文章よりも、むしろ三十年後にしるされた「ゴータ綱領批判」のそれにより多くの親近性をもつことを看取するであろう。銘記さるべきは、「現に存在してゐるやうな全感性的世界の基礎」(四八頁)であり、それを通じて自然を改造しつゝ同時に自分自身をも高めてゆくところの(唯物論研究会訳四〇五頁参照)、そして又、社会がいかに極端な分裂対立に陥らうとも、「個々人と、生産諸力および個々人の本來の生存とを、いまなほつらねてゐる唯一の關聯」(前出)たるところの、「このたえざる感性的な労働と創造」(四八頁)、要するに、個人と社会とを究極において結びつけ、人間と自然とを發展的に統一するところの

生産を中心として、フオイエルバッハにおいては「まつたくたがひにはなればなれになつてゐる」唯物論と歴史（四九―五〇頁）を結合しようとする新しい世界観が、この文章の背後に存在するといふこと、これである。

## 二

「ドイツイデオロギー」によつて確固たる出発点が與へられたにしても、「資本論」への道は決して坦々たるものではなかつた。だが、唯物史観とならんでマルクスの二大功績とされる剰余價值説の確立過程については、すでにふれたことでもあるし（前掲別稿九五頁以下参照）、ここではむしろ「独佛年誌」から「ドイツイデオロギー」への道が、すなはち、古典学派の労働價值説を剰余價值説へおしよめる理論的基礎の確立過程が問題となる。われわれはこの間におけるマルクスの公けにした研究成果として、「『プロシヤ國王と社会改良』批判」と「神聖家族」とをもつてゐるが、彼がはじめて明確に「労働の自己疎外とその止揚」といふ問題を提出するのは、前者と時を同じくして書かれ、後者にその成果が利用されてゐるところの「経済学・哲学草稿」においてであつた。「草稿」は「ドイツイデオロギー」と同様公刊を予定して書かれながら遂に筐底に埋れたまゝになつたもので（その間の事情については「カールマルクス年譜」広島定吉訳三二―三六頁参照）、現在断片的なノートの姿でしか見ることができないけれども、未だになほ主としてフオイエルバッハの思想的立場においてではあるが、英佛独の社会主義者たちの著作を利用しつゝ、古典経済学とヘーゲル哲学とを批判的に攝取することによつて、他のヘーゲル左派の人々に対して彼独自の立場をきづき上げようとするこの草稿（その序文を参照）は、いわゆるマルクス主義の三つの源泉が、青年マルクスの学問的情

熱の中で融合統一せしめられながら、「労働の自己疎外とその止揚」といふ根本問題に結晶してゆく過程を、最も原始的な形態において示すものとして、極めて貴重な文献といはなければならぬ。一九三二年それが発表せられる（ヘーゲル哲学批判の部分は、一九三一年「マルクス主義の旗の下に」誌のヘーゲル歿後百年記念号に発表された）や学界に大きな波紋を起した（Vgl. Falk, Hegels Freiheitsidee in der Marx'schen Dialektik, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 68. Band. 1933. S. 165 ff.）のも当然である。わが國ぐもいちはやく紹介され（改造社版全集第二十六―七巻昭和七年）、一部の注目を惹いた一梯明秀氏「人間労働の資本主義的自己疎外」や後掲の永田・河合の諸氏の論文等―が、「草稿」にひきつづいて発表・紹介された新編輯の「ドイツ・イデオロギー」ほどは注目されず、多くの学者によつて本格的に問題とされはじめたのはむしろ最近になつてからである。しかしこの「草稿」のもつ理論的含蓄がゆたかであればあるほどその解釈乃至評價に種々な立場が生ずる可能性があることは、戦後「草稿」をとりあげてゐる人々の顔ぶれ（難波田春夫著「スミス・ヘーゲル・マルクス」、猪木正道著「共産主義の系譜」同稿「ヘーゲルからマルクスへ」日本法哲学会「法思想の潮流」所載、田中吉六著「史的唯物論の成立」主体的唯物論への道」、向坂逸郎著「経済学方法論」第一巻、日下藤吾訳「経済学・哲学ノート」遊部久藏著「價值論と史的唯物論」等）を見てもあきらかであらう。かつてわが國で「ドイツ・イデオロギー」をめぐつておこなはれた論争もおしへてゐるやうに、また現に前掲の猪木氏の解釈に対する寺沢恒信氏の批判や田中氏のそれに対する森信成氏の批判（月刊「理論」第三卷第八号および第四卷一―三号参照）がしめしてゐるやうに、「草稿」によつてマルクス主義に対する理解が深められると同時に、「草稿」から何を学ぶかは、マルクス主義の全体系に対する態度如何によるともいは



なければならぬ。本稿も一応まづ「草稿」のマルクシズム全体に対する位置づけを、労働の自己疎外とその止揚といふ観点からあたへようとした所以である。以下この視角から、「草稿」の内容を検討することにしよう。

さきにもふれたやうに、労働の自己疎外とその止揚といふ問題意識の根底には、労働は本来人間存在にとつて基本的且つ積極的意義をもつものであるとする人間観が存在しなければならぬ。マルクスはこれを「草稿」の中ではヘーゲルの人間観の批判的攝取といふかたちでのべてゐるのであつて、この意味でまづわれわれは「草稿」の最後に位置する「ヘーゲル弁証法及び哲学一般に対する批判」をとりあげる必要がある。マルクスはそれを「我々の時代の批判的、神学者と反対に、きはめて肝要なものと考へ」て、公刊される筈であつた「著作の末章」に予定してゐたこと（ドイツ語版全集第一部第三分冊三四頁、改造社版全集第二十七卷一八七頁、以下「草稿」からの引用は前者の頁数のみを示す）は、当時の彼が方法および世界観としての弁証法を如何に重要視してゐたかを示すものであるが、マルクスはそこで「ヘーゲル哲学の本当の誕生地でありまたその秘密である精神現象学」についてつぎのやうにのべてゐる「ヘーゲルの現象学とその終局の結果―運動と創造の原理としての否定性の弁証法―における偉大たるものは、何といつてもヘーゲルが人間の自己創造を一の過程として把握し、対象化を対置化として、外化として、そしてかゝる外化の止揚として把握してゐること、かくて彼が、労働の本質を把握して、対象的人間を、現実的なるがゆゑに眞なる人間を、その人間自身の労働の結果として理解してゐることである」と（一五六頁、笠信太郎訳岩波文庫「ヘーゲル論」八〇頁）。ここでマルクスは、ヘーゲルが労働を人間の自己形成の弁証法的な過程としてとらへ、人間をかゝる労働過程の成果として動的発展的に考へてゐる点を指摘し、その意味において労働が人間の本質であるといふヘーゲ

ルの主張に同意してゐるのであつて、この考へ方はさきにのべた「ドイツイデオロギー」さらには「資本論」における労働観につらなるものである。(マルクレーゼも、「精神現象学」緒論自己意識の「主」と「奴」の節での労働観が、この「草稿」の叙述を媒介として「資本論」の「労働過程」に影響してゐることを指摘)してゐる。Marcuse: Ueber den philosophischen Grundlagen der wirtschaftswissenschaftlichen Arbeitsbegriffs. Archiv für Sozialwissenschaft and Sozialpolitik 69 Band. S. 261f) と云ふので、このやうな労働観は、すぐれて近代的な性格をもつてゐるといはなくてはならない。すなはち、従來神話や道徳によつていはば外から意義づけられて來た労働は、封建社会における非生産的支配階級に対抗し「自由」且平等にしてはるかに生産的な資本主義社会をつくり出さうとする勤勞人民の実踐過程を通じてはじめてそれ自身の中に積極的意義を見出す(この点については福井孝治「労働に関する一考察」経済学雑誌第二十一卷第一・二・三号参照)。したがつて、このやうな労働観が最も本質的なたがたで論理的に把握せられるのが、イギリスの産業革命やフランスの政治革命との關聯において遂行された哲学革命の「全運動の完結としてのヘーゲル哲学」(エンゲルス・「フォイエルバッハ論」序言。大月書店版選集第十五卷下四三〇頁)の中においてであつたにしても、決して偶然ではないであらう。私はマルクスが、ヘーゲルの労働観を、その弁証法的第一の偉大さとしてあげてゐること、しかもそのことを彼のはじめての経済学批判のころみの中で書いてゐることを、きはめて注目すべきことと考へる。けだし、一方では、ヘーゲルの労働観は、スミスやリカードの労働價值説を媒介として市民社会分析の鍵にまでふかめられなければならない(マルクスによる古典派経済学研究の必然性)にしても、他方、マルクスが「資本論」で指摘することく、スミスの労働観にはすでに俗流化の危険が存在する(イ

ンステイテュート版第一卷五二頁)のであつて、ヘーゲルの労働観は、それに対する批判の有力な一支柱たりうるからである。

もとよりマルクスの労働観はヘーゲルのその單なる繼承では決してない。さきの引用につづいてマルクスは書いてゐる。「彼は労働の肯定的側面だけを見て、否定的側面を見なかつた。……ヘーゲルがそののみを知り且つ認めてゐる労働は抽象的、精神的な労働である……(すなはち)人間はヘーゲルにあつては自意識にひとしいものと見られてゐる、従つて人間の本質の一切の疎外は自意識の疎外以外の何ものでもない。自意識の疎外は表現として、即ち知識と思惟の中に反映されてゐる人間の本質の現実的、疎外の表現と見られてゐない。むしろ。實在的なものとして現れてゐる現実的な疎外は……自意識の疎外の現象以外の何物でもない」(一五七—八頁)。これに対してマルクスの出発点は「現実的肉体的な、基礎のしつかりしたゆるがぬ大地の上に立つてゐる、一切の自然力を呼吸してゐる人間」(一六〇頁)である。彼はそこからヘーゲルの「人間の自己生産的行爲または自己対象的行爲についての全く形式的で抽象的な理解の仕方」を批判してゐる(一六八頁以下)のであるが、自己の立場を彼は「完成された自然主義——ヒューマニズム」(一一四頁、なほ一六〇頁参照)とよび、「人間による人間のための人間の本質の現実的な領得 (Aneignung)としての」この立場によつて「自然との、また人間との、人間の抗争の眞実の解決」にいたる(一一四頁)とする。われわれはここに近世におけるヒューマニズムの思潮の基本線の上にたちながら、しかもこれまでの部分的な「政治的解放」を全体的な「人間解放」へまでおしすゝめようとするマルクスのヒューマニズムの本質を見出す(古在由重「ヒューマニズムの發展」同氏著「五つの省察」一六三—四頁参照)のであるが、その核心をなしてゐる「実

「實踐的唯物論」の人間觀は、用語上又内容上なほいまだフォイエルバッハの影響をいろ濃くのこしてゐるとはいへ、本眞的にははずでにその靜的觀想的性格を脱却してゐるといはなくてはならないであらう。

### 三

つぎにわれわれはこのやうな根本的立場に立つマルクスが経済学わけてもイギリス古典学派から如何に学び又それを如何に批判したかを見なければならぬ。一八四三年パリにうつつてから本格的に開始されたマルクスの経済学研究〔「経済学批判」序言参照〕は一八四五年二月にはレスケと「政治学および経済学批判」の出版契約を結ぶにいたるほど急速に進展する。この書物は結局公刊されず（ドイツ語全集第五卷「ドイツイデオロギー」編輯者序言十三―四頁参照）、したがつてわれわれはマルクスの最初の「経済学批判」をその予備的研究たる「草稿」のかたちでのみもつわけである。

マルクスは古典派経済学の理論の積極的意義を、第一に、市民社会における階級關係の基礎構造をあきらかにしたと、第二に、その階級対立の矛盾またはその矛盾の集中的表現として労働者の窮乏化を、資本主義發展の必然的結果としてとらへたことに見いだす、すなはち、第一章稿において、労働・資本利潤・地代のそれぞれについて古典学派の諸前提・諸概念にしたがひつゝ分析し、三大階級の性格・その相互關係について、「労働者が商品に、最も悲惨な商品に引き上げられること、労働者の窮乏はその生産の努力および大きさと逆の關係にあること、競争の必然的な結果は、少数者のもとにおける資本の蓄積、すなわちヨリおそろしい独占の再現であること、また最後に、資本家と地代生活

者との差異は、耕作者と製造労働者とのそのやうに消滅して、全社会は有産者と無産の労働者との二つの階級にわかれなければならないといふことを示す(八一頁)。さらに第二・第三草稿において、経済学の歴史をあとづけつゝ、「私有財産をば人間にとつて單なる対象的実体としての、みかんがへる重金主義および重商主義の支持者」(一〇七頁)から、富の源泉を労働に求めながら、それを農業といふ「まだ自然に、よつて規定された特殊な定在様式においてのみ」認める重農主義(一〇九頁)を経て、労働一般をその原理とする経済学がアダム・スミスによつて樹立されること、さらにリカードによる分配論の確立によつて、資本家と労働者との対立関係が明確につかまれるとともに、「地主を全くありふれた、平凡な資本家に轉化し、それによつて、如上の対立を單純化し、尖鋭化し、かくて対立それ自体の止揚を促進するところの現実の運動を予想し、準備したといふことは、近代イギリス経済学によつて成就された偉大な業績である」(九九頁)事を、封建的地主に対する産業ブルジョアジーの勝利といふ現実の史的推移との關聯においてあきらかにするのである。かくのごとくマルクスはイギリス古典學派の進歩性を認めつゝも、しかし同時にそれがその立場を超え得ないところからくる限界、を次のやうに指摘してゐる。「労働をその原理として認めた(アダム・スミス)経済学(によつて)……ルーテルが現実的な世界の實在として、宗教を、信仰を認め、従つてカトリック的な邪教に対立したやうに、彼が宗教心を人間の内的な本質とさせ、外的な宗教心を止揚したやうに、また彼は僧侶を俗人の心の中に移したから、彼が俗人以外に存在する僧侶を無視したやうに、人間の外に存在し、彼から獨立した、したがつて單に外的な仕方でのみ維持され確保れるところの、富は止揚される。いひかへれば、この富の外的な思惟なき必然性は止揚される。それと共に、私有財産は人間自体に合体され、人間自身がその本質として認められる。

だが、そのゆえに人間自身は、ルーテルの場合には宗教におけるやうに、私有財産の制約のうちにおかれることになる。だから労働をその原理とする経済学は、人間認識の外見のもとに、むしろただ人間の否定を徹底的に遂行したものにすぎないのである、なぜなら、もはや人間が私有財産の外的實在に対する外的な緊張状態に立たないで、かれ自身この私有財産の緊張せる實在となるのであるから」(二〇七—八頁)。要するに「経済学は生産の本來的な核心としての労働から出発しながら、しかも労働には何ものも與へず、私有財産にすべてを與へる」(九二頁)、これに反してマルクスは私有財産から労働を見ないで労働、——「ひとが労働について語るとき、かれは直接に人間自身を問題としてゐるのだ」(九三頁)——から私有財産を見る。そして「私有財産の起源、についての問題を、人類の發展過程に対する外化された労働の關係についての問題に轉化する」(同上)、かくてマルクスにとつての問題はかうである。「いかにして人間はかれの労働を外化し、疏外するやうになるか、いかにしてこの疏外が人間の發展の本質のうちに基づくべかられてゐるか。……ところでこの問題の新しい提起はすでにその解決を含んでゐる」(同上)。マルクスはこのやうな問題意識のもとに、さきにのべたやうにスミス・セイ・リカード等から主として賃金、利潤・地代等に関する理論的成果を批判的にとり入れ、さらにシュルツ・ペクルル・ビュレ等から資本主義下における労働者の現状分析をまなびとりながら、第一草稿の終り、全集編輯者によつて「疏外された労働」となづけられた部分(八一—九四頁)において、上述の問題に対する自己の立場からの一応の解答の方向を與へてゐる。すなはち本來人間の發展と尊嚴の基礎であり、人間をして人間たらしめる活動たる労働は、資本主義社会においては、完全な疏外乃至外化に陥つてゐるのであるが、それは、まづ、労働者の生産物が労働者自身に属さず、労働者がはたらけばはたらくほどかへつてみづからの窮乏

の度をふかめにすぎないからであり、次に、元來人間の自発的な自己実現の行爲であるべき労働がかへつて他人に從属するところの強制労働といふすがたをとるからであり、さらに、そのために人間が彼の種属的實在から疎外され、種属生活がかへつて個人生活の手段と化すからであり、最後に、「人間が彼の労働の生産物から、彼の生活活動から、彼の種属的實在から、疎外されたことの直接の結果は、人間からの人間の疎外である。人間が自分自身と対立してゐるとき、それは彼に他の人間が対立してゐる」(八九頁)からである。したがつて究極の問題は、対立する人間と人間との關係そのものの止揚をめざす「労働者階級の政治的形態」にある(九二頁)といはなければならぬ。労働の疎外についてのマルクス独特の把握は、その疎外が、いつ、だれによつて、いかなる仕方でも止揚されるべきかについての彼特有の考へ方を生み出す。かくてマルクスは、すでに「労働を引き上げ、これによつて労働者階級の狀態を改善しようとするか、もしくはは労働の平等をば(ブルードンのやうに)社会革命の目的と見なすところの、改良主義者」(四六頁)の不徹底性を批判する立場に立つてゐる。すなわち、後年マルクスは「マニフェスト」の第三章「社会主義のおよび共産主義の文献」において「A」反動的社會主義「B」保守的社會主義またはブルジョア社會主義「C」批判的、空想的社會主義および共産主義のそれぞれに対して批判を加へてゐるが、「草稿」においてもすでに、「A」に屬するドイツ真正社會主義の「無知な批評家」(三三頁)や、「B」の代表者たるブルードンや、「C」に含まれるカペーなどの「未完成な共産主義」(一一四頁)などに対比して、自己の立場をかなり明確に規定してゐるのである。以上のごとき「草稿」における經濟學批判を、「資本論」との關聯において見るならば、次の三点が特に注意されるべきであらう。

「1」封建地主に対抗して登場した「労働する……工業家」(一二六頁)が「富の源泉として死物のかはりに人間の

労働を發見し、創造した」こと(一〇二頁)、それとともに發展した「自然科学は……工業を媒介として人間生活のなかに入りこみ、人間の生活を改造し、人間の解放を準備する」こと(一二二頁)、しかし同時に資本主義の原理としての労働は外ならぬ、私有財産の本質としての労働であり、かくてそれは「人間を肯定するかのような外見の下にかへつて人間を徹底的に否定するものに外ならない」こと(一〇七―八頁)、この資本主義のもつ肯定面と否定面の「労働の自己疏外の理論」による統一的把握、これはがマルクスの経済学批判の鍵であり「草稿」資本論をつらぬく基本線である。「二」かくのごとき資本主義における生産力と生産関係の矛盾の集中的表現としてマルクスは分業の問題を特に注目する。「分業は労働の生産力、社会の富及び文化的な欲望を高めるが、一方、労働者を機械にまで引下げる」(四四頁)これは第一草稿で展開される「窮乏化理論」の中心論点であるがマルクスはさらに第三草稿でも「分業は疏外化のもとにおける労働の社会性、國民経済的な表現である」(一三九頁)とのべ、スミス・セイ・スカルベク・ミル等の分業論を吟味してゐる。マルクスの分業論は、戦後史的唯物論の再検討との關聯において一部の學者の注目するところとなつてゐる(高島善哉「生産力の構造」経済評論昭和二十四年八月号参照)が、「資本論」研究においてもなほとりあげるべき問題がのこされてゐるのではなからうか。この点の探究は他日を期することにし、ここではただ「草稿」においてすでに分業論が非常に重要視されてゐることを指摘するにとどめる。「二」マルクスは資本主義社会の分業労働を「抽象的な活動」(四二頁)、「抽象的労働」(四五頁)とよび、人類の大多数が抽象的労働に還元される「こと(同上)」を特に問題としてとりあげてゐる。また「草稿」にはすでに「フェティシズム」といふ言葉も散見する。しかし、この「抽象的労働」をただちに、「資本論」第一篇「商品および貨幣」におけるそれと結びつけることは出來



ない。それはむしろ「資本論」の第四篇「相対的剰余価値の概念」および第七篇「資本の蓄積過程」の内容につらなる。このことの確認は後にも論及するやうに「草稿」と「資本論」との基本関係を正しく理解する上からも極めて重要である（この点については安部隆一「労働の抽象的性格」経済学雑誌昭和二十三年一月号が参照吟味さるべきであるがここでは立入らぬ）。

## む す び

「断るまでもなく、資本論は、マルクスの廿有年間に文獻的に嚴密に指標すれば、一八四四年の「経済的」哲學的草稿」から一八六七年度の資本論の發表をみたまでの期間の刻苦にみちた研究過程を媒介として結晶せしめられたところの偉大なる研究の成果である。それゆえに、われわれは研究のこの「成果」を認識するには……資本論を出発点としてわれわれの研究を「草稿」にまで遡源せしめなくてはならない（田中吉六「主体的唯物論への途」一三頁）。「この頃（一八四三年四四年の頃をさす―引用者）のマルクスの経済学研究の達成した成果を示しているものは、「経済学哲學に関する手稿」であろう。この手稿は、極めて難解な文章でつづられているが、マルクスの経済学研究が、まずどんな所に着限しているか、そして、ここでいかに進むか後年の「資本論」の端緒がつかまれているかを示して、極めて興味深いものである。この手稿から「資本論」への道はまだ遠いのであるが、細い一本の道が「資本論」の方向に走っていることは、見逃されない」（同坂逸郎「経済学方法論」第一分冊二七頁）。「實踐論」の確立（田中氏）、「物神性」の発見（同坂氏）といふ主眼点の相違はあるが、「資本論」の端緒を「草稿」に求めることに

おいては両者の見解は一致する。「労働の自己疎外とその止揚」にマルクスの思想の核心を見んとする私もまたその点では同じであるが、「草稿」から「資本論」への「はるか(に)……遠い」「刻苦にみちた研究過程」の間の三つの里程碑として、「ドイツ・イデオロギー」(一八四五—六一年)、「共産党宣言」(一八四八年)および「経済学批判」(一八五九年)をとり、両者の関係をつぎのやうに考へた。

〔A〕さきへのべたやうに、「ドイツイデオロギー」において、フォイエルバッハ的な非実践的また非歴史唯物論が克服され、マルクス独特の労働本質論を基底とする人間観および歴史観が確立する。〔B〕その唯物史観を資本主義分析に適用することによつて、資本主義社会の一時的過渡的性格、労働の自己疎外止揚の歴史必然性を証明し、もつて従來の社会主義的諸思想を克服すると共に、その理論的基礎の上に具体的な実践綱領をうち出したのが「宣言」である。〔C〕しかるに「宣言」までの資本主義分析は、賃労働者の窮乏化といふ事実を資本主義社会における生産力と生産関係の矛盾から解明することによつて、一応従來の経済学および社会思想を克服しながらも、資本主義が外ならぬ商品生産社会であり、したがつてその運動法則は價值法則を媒介としてのみ発現するといふ所以の論理的究明が尙不徹底であつたため、その古典学派批判も、いはば、階級分析に關してはきはめてするどいが、商品分析についてはいまだ十分におこなはれることが出来なかつた。その不徹底性を克服する鍵こそ「商品に含まれてゐる労働の二重性」に關する理論であり、それにはじめて到達したのが、マルクスの「経済学批判」に外ならない(「資本論」前掲書四六頁参照)。資本主義社会における労働の自己疎外は、これによつて十分な論理的基礎をあたへられることになる。「商品」より出発して「諸階級」に終る「資本論」が書かれるにはなほ約十年の歳月を關するが、そこにおける「近代的

社会の経済的運動法則を暴露すること」(同七頁)によつて史的唯物論の資本主義社会への適用は完成され、古典学派の労働價值説の剰余價值論への深化によつて、社会主義は「一つの科学となつた」(エンゲルス「空想より科学へ」岩波文庫版四四頁)。「資本論」がマルクシズムの「総括」であるとされる所以である。

しからばその「端緒」としての「草稿」はどうであらうか。「草稿」においてはじめて、「労働の自己疎外とその止揚」といふ問題意識が、「三つの源泉」からの批判的攝取を通じて、理論的に明確化されてくること、まさにその意味においてそれが「端緒」であり、河合榮治郎氏の言葉をかりるならば、「以前のものの決算が此の中に明瞭に示されてゐると共に、新しきものが萌芽を藏してゐるといふ点において、正に彼の思想上の峠に位するとも考へられる」(『経済学論集』第七卷第一号八二頁)。ところでその理論的内容が「資本論」との関聯においてもつ意義の測定に、あたかも今かかけた三つの里程碑と「草稿」との時間的距離が役立つであらう。「A」『経済的』『哲学的草稿』において、マルクスの哲学的唯物論はその基礎においては出来上つている。「哲学と歴史」永田広志選集第三卷七〇頁)と、「B」草稿の中ですでに「宣言」とほぼ同様の諸社会主義批判の立場に立つてゐることはすでにのべたごとくである。事実「草稿」から「ドイツ・イデオロギー」また「宣言」まではわづか数年にすぎない。「C」しかるに「草稿」と「経済学批判」との間には実に十五年の歳月が横たはつてゐる。研究の導きの糸はあたへられ、実践の主體的立場も定まつたとしても、ブルジョア社会の経済的細胞形態たる商品の價值形態の「細かい穿鑿だて」(『資本論』六頁)のためには、尙「はるかか)に……遠い」「刻苦にみちた研究過程」がたどられなければならないのであつた。